見者、若國之崎乎、因曰國崎郡、

長門國豐浦津

〔日本書紀八仲哀〕二年六月庚寅、天皇泊于豐浦津、〔○長門國〕七月乙卯、皇后〔○神功〕泊豐浦津、

〔日本書紀通證十三仲哀〕豐浦津〔倭名鈔、長門國豐浦郡、〕

紀伊國德勒津

〔日本書紀八仲哀〕二年三月丁卯、天皇巡狩南國〔○中略〕至紀伊國而居于德勒津宮、是時熊襲叛之不朝貢、天皇於是將討熊襲國、則自德勒津發之、

〔日本書紀通證十三仲哀〕德勒津宮〔トコロヅ或曰、日高郡江名村今宮之社地是也、〕

伊豫國饒田津

〔夫木和歌抄二十六津〕にぎたづ　伊與

〔松葉名所和歌集二仁〕熟田津　伊豫〔仙覺（萬葉集抄下文同）ニ見タリ〕

〔愛媛面影三温泉郡〕熟田津

舊蹟考曰、土俗の傳說に、昔は温泉の地名をなりたづといひ、あき田津ともいひ、又にぎ田津とも云、湯の邊迄海にて船つきなりしが、今は地脈變じて二里ばかり西に隔りぬ、なり田津、あき田津、にぎ田津を合せて三津といふなりなど或書にいへり、大成按に、古は熟田津といへるのみにて、なりたづ、あきたづといふ名、古書にも其外の書にもいまだ見あたらず、さるをかの反歌に飽田津とあるは、千蔭が萬葉略解に、飽は饒の誤なるべし、又久老云、或人其地の樣よくしれるに聞しは、饒田津といふも、飽田津といふも、今猶ありとぞ、猶考ふべしといへり、飽は饒と字形似たれば、寫誤りたるものなり、或人の說は非也、飽田津と云地名あるにあらず、又なり田津といふも固りなき事也、そはかの熟田津の熟を然とも書誤れるを見て、字を訂さずしてナリとは訓誤りたる者なるべし、三津濱人のいへらく、かの山際まで昔は海にて、此邊は築地なりと、實にさる事なるべし、さて三津の三は、例の假字にて、古天皇等の行幸の時、御船の泊し所なれば御津といひしを、築地と成ても猶海際なれば、今も御津とはいふなるべし、又熟田津石湯とある石は、古書に磯と